

第1日目 2025年9月6日(土)

午後の部 14:00~16:40

テーマセッション(2)

日本におけるリプロダクションへの歴史社会的アプローチ
——産婆・巡回指導婦・助産録

オーガナイザー・司会 田間泰子(大阪公立大学)

討論者

伏見裕子(神近畿大学)

宝月理恵(お茶の水女子大学)

【企画趣旨】

現代日本では少子化が続き、他方で生殖補助技術が普及して出生の約1割を占めるなど、リプロダクションのあり様は歴史的に大きく変化している。しかし、少子化の文脈だけでリプロダクションが語られる現状は、第二次世界大戦前と何が違っているだろうか。以下の三報告は、家族形成に大きく関わるリプロダクションについて、第二次世界大戦前後の日本を対象としてその社会性を明らかにする。

第一報告「大正・昭和期の助産録に見るリプロダクションの変遷」(松岡悦子)は、ある助産院の1914年から1978年までの助産録を史料とし、そこに記載された9876件の出産記録を分析することを通して、リプロダクションが社会状況や政策と密接な関連をもちつつ変化してきたことを明らかにする。第二報告「1940年代前半のリプロダクション政策とその実践—巡回指導婦制度を中心に」(大出春江)は、大きな政策的変容のあった厚生省の設立前後から1944年までを対象とし、戦時下の妊娠・出産にもっとも近い産婆(助産婦)が主たる担い手となった巡回指導婦制度を扱う。「巡回指導婦」が必要とされた背景と、彼女たちが自ら望んでこの弼割を引き受けた理由を探り、戦後の受胎調節実地指導員制度と比較する形で、戦時下のリプロダクション政策の実現過程を明らかにする。第三報告「妊娠・出産を『記録する』ということ—1907年~1960年の4種の助産録分析から」(田間泰子)は、4地域4種の助産録を対象とし、史料の形式と記載内容の変化から、上記2つの報告の背景をなす生への管理的まなざしの変容と、産婆が専門職化する過程を考察する。補足的に、戦前の産婆雑誌や戦後の受胎調節実地指導員用カルテ等を参照する。

討論者に、近代から戦後日本におけるリプロダクション研究に新しい問題提起をしておられる伏見裕子先生と宝月理恵先生を迎え、リプロダクションと家族の社会的位置づけに関わる諸課題を論じる。